
桃と鯉

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃と鯉

【Nコード】

N5987Z

【作者名】

景雪

【あらすじ】

健雄は中学三年生。祖父母が営む銭湯で暮らしている。ある日、健雄は桃のような尻を持つ女と、錦鯉の刺青を入れた男の客を目撃する。昭和35年、未だ戦後が訪れていなかった北関東の某都市の物語。

第113回文学界新人賞公募作品。

朝顔が襟口に花を咲かせ、すぐ右下に同じような花が、またすぐ左下には蕾が、白地に紺で染め抜かれていた。蔓はあたかも背中から女に忍び寄って行くのか、そろりそろりと手を伸ばしているように思えた。長い髪を高くまとめているせいで、女のうなじが光を発していると思間違うほどはつきりと見え、髪とともに引っ張られた肌が、透き通る白さを強調していた。

女が帯を解き、浴衣を肩からおろすと、背中の真ん中に走る線が、肩から腰にかけて反っているのが良く見えた。浴衣が腕からすっかり抜かれてしまうと、女の尻が露わになった。腰までの細さに比べて左右と後ろに大きく張り出したそれは、張り過ぎて割れてしまうほど強烈な丸みを帯びていて、熟れる前の白桃を想わせた。裸になった女が、風呂場に向かって歩を進める度に、桃のような尻が右に左に小刻みに弾んだ。じっと見つめていると尻は、そこに頭脳があって、考えながら動いているように思えてならなかった。

「番頭さん。ちよつと、番頭さん」

声をかけられて健雄は、勢いをつけて男湯を振り向いた拍子に、番台の棚に下から膝を打った。

「いで……」

週に何度か顔を見かける年寄りから風呂代の硬貨を受け取り、背中を丸めて打ちつけた膝をさすった。赤くはなっていたが、血が出るといったひどい怪我ではなかったので鼻から長めに息を吐いた。男湯に向かう年寄りの背中の方こうに、さっき桃尻の女と一緒に来た男が、煙草を一本吸い終わって帯に手をかけているところだった。濃紺の浴衣が筋肉質の腕でもって捨てるように脱がされ、背中一面に鮮やかな彫り物が浮かび上がった。朱色の牡丹と桜の間を縫うように一匹の錦鯉が飛び出て、まだ照明のついていない脱衣所に、赤と黄色を混ぜた魚がたった今産み落とされたようだった。男が禪を

解く動作を行う度に、皮膚が波打ち、鯉は本当に生きているように見えた。

男が風呂場に消えてしまうと、健雄は正面に向き直り、それほど客の多くない夕方前のこの時間帯を、無駄にぼんやりとただ時の過ぎるままに費やしていた。見回りの看守よろしく、裏で火の調節をしている祖父がたまに顔を出すので、健雄は一応数学の教科書とノートとを並べて広げ、しかし書くことといったら意味不明な落書きや呪文や記号の羅列に過ぎなかった。

桃尻の女と錦鯉の男は、今日初めて見かける客だった。最近引越してきた夫婦だろうか、歳は三十前後で、北関東の片田舎にすんなりとは馴染まない、洗練された都会の雰囲気は無意識に感じた。健雄は番台に座りながら、ノートに鉛筆で薄く桃と鯉を描いてみた。消しゴムで何度も消しながら、丁寧に描いたつもりだったが、桃を描いたはずの物はトランプのスピードにしか見えず、鯉を描いたはずの物はおたまじゃくしにしか見えなかった。健雄は十五分かけて描き上げたそれらを、消しゴムで殴りつけるように消したが、力を入れ過ぎたのでページが破れてしまった。

「いい、お湯でしたよ」

顔を上げると桃尻の女が、風呂から上がって番台の前を通るところだった。女は下から流し目で健雄を見つめ、厚い唇の端を少しだけ持ち上げるようにし、頬を薄く染めていた。健雄は瞬きをするくらいのもちの力でもって頭を下げ、通り過ぎる女の姿を見送ったが、湯上がりの尻を見られなかったことが悔やまれた。握っていた鉛筆をノートに押し付けると、折れた芯が、番台の下に乾いた音を立てて転げ落ちた。ちょうど出てきた錦鯉の男は転がる芯に一瞥をくれ、待っていた桃尻の女の肩に手を置くと、下駄をトツコン、トツコンと響かせながら並んで歩き出した。濃くなった夕暮れが二人の後姿を細長く橙に照らし、ヒグラシが高く短く鳴く声が、七月の空気に染み渡っていった。

「父ちゃんと、母ちゃんが仲良くなつて、お前らが生まれたんだっぺ」

的も定めず、教壇から垂れ流されてくる声を耳の隅で受け、健雄は教科書に書かれた堅苦しい文字を、夏の暑苦しい空気を通して眺めていた。

「先生、どうやって、子どもができるんけ？」

手を挙げて起立し質問する信一に、教室の方々から笑いが起こった。しかし笑っているのは男子ばかりで、女子は男子に対して軽蔑したような視線を向けるか、知らん顔をしているかのどちらかだった。

「しっかり教科書読め。おめ、教科書良く読んでねえから、数学で十点とんだぞ」

教師の言葉に、今度は女子も含めて、教室のほとんどの生徒が笑った。信一は坊主頭をかきむしりながら、教室中を笑わせた功績を確かめるように周りを振り返り、背中を無意味に反らせて席に着いた。歯を見せてはにかむ信一の口の端には、給食のフライの衣かすが、ぬとぬと脂分を光らせていた。

健雄は知識の進んだ同級生から、男性器を女性器に入れて、子どもが生まれることを学んでいた。男性器の方は、自分にも付いているからその構造は大体分かる。しかし女性器は、一体どんな色、形状をしているのか、皆目分からなかった。夜、祖父母が寝静まってから自慰をする際の、硬く肥大した己の陰茎を思い浮かべ、それが入るくらいの穴がぽっかりと空いている様を、健雄はまぶたの後ろに描写した。そんな大きな穴があったら、女は歩く時に大変だっぺ。がに股になっちまうべよ。健雄は右隣に座る啓子を横目で盗み見て、啓子の股ぐらにまさかそんな大きな穴があるとはとても信じられなかった。啓子の女性器も、誰かの男性器を受け入れるんけ？　そこまで考えて、健雄は勝手に進んでしまった想像を打ち消した。無意味に頭を振る彼に、不思議そうな視線を向けた啓子と、一瞬目が合えば、奥二重の丸い瞳と、小振りで筋の通った鼻が、急に視界に入っ

てきた。いつもだったら俺の方を見てくれと願っている彼だったが、事故のように偶然目が合ってしまうと対処の仕様がな。啓子は目が合った健雄に微笑を向けたが、彼はそれに応えるような度胸を持ち合わせてはおらず、ただごまかすように視線を窓の外に向けることしかできなかった。目に入ってきた校庭には、縁に植えられた桜の木が青々と葉を茂らせていた。全開にした窓に一番近い席の健雄であっても、じっと座っているだけで汗がにじんできた。ひっきりなしに鳴き叫んでいる数十匹のアブラゼミの、「ジーツ」という単調過ぎる声は、ひたすら暑さに耐えている忍耐の結果にしか思えなかった。

「よお、虫捕りに行くべよ」

放課後、教科書の類をカバンに押し込んでいる健雄に、教科書の一冊も入っていないような、薄っぺらい布カバンを肩からぶら下げた信一が声をかけた。信一は数ヶ月前に兄貴に殴られて前歯の一本を折っており、歯を出して笑うと欠けた前歯が黒く目立った。昼に授業が終わる土曜日は、銭湯が開く二時までを自由に使えた。

「でっかい森にすっか？ 中くらいにすっか？」

「んだな……中くらいにすっぺ」

教科書を入れ終わったカバンを肩からかけると、健雄はもう教室を飛び出してしまっている信一の後を追った。廊下を走っていると、ころを見つかり、担任に拳骨をくらったが、担任の姿が見えなくなると、また駆け足で昇降口に向かった。

上履きから靴に履き替え、二人は一直線に校庭を駆け抜けた。目の前に立ちのぼる巨大な入道雲に飛び込むように、競い合って馬鹿みたいに一生懸命走った。梅雨が明けて久しく雨を吸っていない踏み固められた校庭の土が、乾いた固さを薄い靴底に無言で伝えてきた。

中くらいの森は、市の中心部にひっそりと残った田園地帯の、外

を囲むように配置されている雑木林だった。長さは百メートル弱、奥行きはその半分もない。林の所々には落ち葉から作られた堆肥が小山のように積まれており、カブトムシの幼虫が毎年大量に見つかった。二人は森の、左の端っこにある樹液の木を目指した。子どもが二人でやっと抱えられるほど大きなクヌギの木で、小学生くらいの子どもの目の高さで、ずっと上の三メートルくらいの高さの二カ所に、毎年だらだらと樹液が出て、たくさんの虫たちを集めていた。やや奥にあるその木までは下草をかき分けて行くのだが、子どもたちが引っこり無しに行き来するので、ちょうど一人一人が通れる道が、踏みつけられた下草によって作られていた。虫捕りのメインは夜か朝で、昼に行ってもカブトムシやノコギリクワガタなどの大物はあまりいない。いてもカナブン、スズメバチ、蝶の類がほとんどだ。しかし去年の夏、何を間違えたのか大型のノコギリクワガタのオスをまっ昼間に捕った経験から、健雄たちは昼間にも虫捕りに精を出すようになった。

「なんだべ、これ」

樹液の木へと続く下草を半ばほど行ったあたりで、信一が言った。言うのとほぼ同時に何かを拾い上げた信一の手には、雑誌のような書籍が握られていた。

「うわ。すげえ」

健雄は無意識に声を出した。風でパラパラとページがめくれ、裸の女の白黒写真が目に入ったからだ。

「うお！」

突然大声を上げて信一が尻もちをついた。その拍子に、握られていた雑誌を放り投げたので、健雄はすかさず地面に落ちたそれを拾った。

「でっけえヤマカガシだっぺよ。びっくりした」

信一は毒蛇が通っていった先を見つめながら、本を健雄に奪われたことを知った。尻に付いた土を左手で叩き落しながら、右手を差し出してとがめるように言った。

「俺が見つけたんだっぺよ。返せ」

「最後に拾ったのは俺だ」

「ずりいぞ。啓子に言いつけっかな、おめえがスケベな本、読んでたって」

「そりゃ、まずかんべよ。分かった、今日、うちの番頭に来いよ、女の裸、見放題だっぺよ」

顔をきつく絞ったように健雄を睨んでいた信一の表情が、おかしくくらいに緩められた。

「ほんとか？ いいんけ？ 俺がやっても」

「いかんべよ。誰がやっても一緒だっぺ。その代り、この本は俺に貸してくれ」

「分かった」

雑誌に付いた土や葉を丁寧に払いとり、見つからないようにノートにはさみこんで、健雄はカバンにしまった。そこまで終わって、両腕に信じられないくらい大量の蚊が吸いついていることに気付いた。もうすでに腹を一杯に膨らませているやつも多く、吸われている場所は赤く腫れ上がり始めていた。

健雄は掌を無茶苦茶に打ちつけて、蚊を次々につぶした。蚊の体が粉碎されると、吸い取った血が漏れ出し、腕の所々に赤い斑点を作った。急に強烈なかゆみに襲われ、健雄は垢が黒くたまった爪でかきむしった。爪に引きずられて爪垢や死んだ蚊の体の一部と混ざった血が、やや黒く変色して腕の上に伸びた線を作った。

二人は樹液の木に辿り着き、昼間には珍しいカブトムシを見つけた。オスとメスが仲良く樹液を吸っていた。

「おめ、持って帰るか？」

「俺はいいよ。健雄が持って帰れ」

信一は不気味に前歯の黒い点を覗かせながら獲物を健雄に勧めた。取り立てて大きくはないカブトだったから捕まえるかどうか迷ったが、せっかくなので持って帰ることにした。健雄はカバンに折りたたんで入れておいた紙袋を取り出し、その中に二匹のカブトムシを

放り込んだ。家に帰るまで健雄の手元で、カブトムシが足で紙をこする抵抗の証が、がさがさと断続的に音を出し続けていた。

ところどころひび割れた板張りの外壁を少しでも鮮やかにと水色に塗り、しかしペンキが禿げかかって下地のくすんだ木の色が覗いている。一階には右に男湯、左に女湯の入口があり、入ってすぐに番台が設けられている。階段を登れば、二階には襖で隔てられた部屋が二つあり、健雄と祖父母がそれぞれを使っている。入口の真上、水色の壁に右から横書きで「亀の湯」と書かれている、大正三年に建てられた銭湯が健雄の家だ。学校がある日は、祖父が金場を管理し、健雄が帰宅するまで祖母が番頭を務め、掃除は二人で行う。学校が終わってから健雄が番頭を代わる。学校が休みの日と土曜日は、健雄は主に番頭だが、掃除も手伝われる。もうすぐ十五歳になる彼が、六年続けている日課だった。

健雄は両親を知らない。父は、初めての子である健雄が母のお腹にいる太平洋戦争末期に出征し、戦後遺骨となって還ってきた。まだ二十三の母を気遣い、祖父は母を生家に戻し、やがて母は再婚したそうだ。やっと歩けるようになった頃に一度会ったことがあると聞かされているが、健雄は母の記憶が全くない。

（あいたたブンブン あいたたブンブン）

まだ歩けぬ幼い頃、抱かれるのは祖母の腕の中だった。当時五十と少して老人のようにやせ細った祖母の腕が、繰り返し骨ぼったく当たる感覚を、健雄は今もわずかに背中に残している。

（あいたたブンブン あいたたブンブン）

祖母は張りのない声で子守唄を聞かせた。健雄は歌詞のその部分だけを鮮明に覚えている。何て名前の唄であるか、歌詞がどんな意味であるかは一切知らなかったが、その一節だけは耳の器官の一つにでもなったのか、決して忘れることができなかった。健雄は耳かきを使って無理に奥までほじくったことがあったが、勿論その一節が耳垢と一緒に取れるようなことはなく、かわりに血が出てしまっ

て祖母に叱られた。

「番台に座っててくれ。カバン、置いてくっから」

信一にそう告げて、健雄は脇の階段から、二階の自分の部屋に駆け上がった。階段の途中で振り返ると、番台目がけて馴染みの年寄りが数人、まだ二時には少し早いというのに詰めかけていた。

「青柳さんちの、しん坊じゃねえか」

馴染み客の一人が、信一に声をかけるのが聞こえた。

二階に祖父母がいないことを確かめて自分の部屋に入り、戸を閉める際に隙間が一切開いていないのをしっかりと見、カバンから拾った雑誌を取り出した。パラパラと急いで簡単に目を通し、思った通りの代物であると再確認すると、心臓が思春期の少年そのものの暴れ方をした。学習机の一番下の引き出しを開け、ノートにはさんだまま奥に入れ、引き出しをしまった。若干硬くなりかけている陰茎を鎮めるように深呼吸を三回して、一階への階段を駆け下りた。

「こら、おめ、何してたんだ」

健雄を見つけた祖母が、階段を下から覗きながら言った。見上げているので祖母の額には、幾重にも細かい皺が刻まれていた。

「今日は、遅くなったから、友達に番頭手伝ってもらおうと思っ
て。すぐに掃除すっからよ」

祖母が放り投げたブラシを、健雄は受け取り損ねて落とした。ブラシの柄が足の甲に当たり、妙に高い声を上げてしまった。番台に目を向けると、肩をすばめておっかなびっくり事の顛末を静観していた信一が、少しほっとしたように女湯に視線を向けたところだった。健雄は足を軽く引きずりながら男湯に入り、年寄りの貧弱過ぎる背中を尻目に床をブラシで磨いた。湯船に浸かりながら鼻歌を歌う年寄りのしゃがれた声が、足の甲に鈍く残る痛みのせいで無性に耳障りに思えた。

その日、桃女も鯉男も来なかった。番台に座らせてやると言ってしまうから、信一に桃の尻を見られてしまうかと内心はらはらし

ていたが、杞憂に終わったおかげで、健雄は信一にばれないように口を歪めた。

「ちえっ、ばばあばっかじゃねえかよ」

信一が舌打ちするのを聞いて、健雄は歪めた口元を更に不細工に崩した。健雄の顔を見た祖母が、「おめ、変な顔になっちゃうからな」と灰皿にたまった吸殻を片付けながら言った。決して男前ではない顔がこれ以上不細工になってはかなわないと、健雄は顔が元に戻るようと力をそっと入れてなでた。

八時で風呂を閉め、掃除や後片付けを済ますと、祖父母は十時に寝るのを習慣にしていた。明かりが消され、暗い静寂が廊下の端から端まで埋めるのを待って、健雄は机の引き出しを開けた。襖一枚を隔てただけの祖父母に気付かれないように、少しずつ、開けていった。たまに、「ギ」だか「ゴ」だか木がすれる音を立ててしまったが、隣の部屋から規則的に聞こえてくるいびきが、不自然に止まることはなかった。健雄は腕が差し込めるだけ開いた引き出しに手を突っ込み、雑誌をはさんで分厚くなっているノートを取り出した。汗が次から次に額ににじみ、それが滴ってまぶたにのしかかり、瞬きが異様に重く感じられた。下唇の端を上に向けて息を細長く吐くと、まぶたに乗った重しの汗はしょっぱく弾け飛んだ。

本を持ったまま尻で畳を這い、障子を開けた。月明かりが細く淡く差し込み、もう替え時がとうに過ぎた古畳を、うっすらと照らした。壁にかかっている標本箱の蝶、スミナガシの翅に月光があたり、青く短い閃光をスンツときらめかせた。健雄は外側のノートを外し、雑誌を月光の元に置いた。表紙に写る乱れ髪の女が、黒目がちな切れ長の瞳でもって、何か言いたげな視線を送っていた。息もしないでそれをじっと見つめていると、下着の中で陰茎が硬直してくるのを、触れなくとも健雄は十分に感じる事ができた。ややはだけた、和服の胸元から覗く乳房の膨らみのほんの裾野を透かすように見て、健雄は喘息でもないのにクス―クス―と微かな音を出しながら呼吸

をした。下向きに収まっている陰茎が窮屈に思えて仕方なかったの
で、下着の上から位置をずらすと、陰茎は勢いをつけて跳ね上がった。
それに軽く触れ、脳髓を掻き混ぜられたような感覚を楽しみ、
健雄はたまらず熱い塊で息を漏らした。

ページをめくると、肌を露わにした女の身体が飛び込んできて、
健雄はたまった唾を一気に飲み込んでしまい、乾いた喉に軽い衝撃
が加わった。番台や風呂場の掃除で毎日のように目にしている女の
裸が、全く異なる曲面をもっていて、だらりんぶらりと健雄の眼
球に迫ってきた。乳房の豊かな膨らみと、腰回りのまん丸い肉付き、
太もものパツツと張られた艶、全てが、これまで十五年生きてきて
一番女を強烈に意識させる対象となった。しかし健雄が最も時間を
割いたページ、月夜の覗き見のほとんどを割り当てたページは、背
後を見せて写る女の尻だった。尻が始まる腰のくびれ部分と、尻が
終わる足の付け根との境界線にできる肉の皺、健雄はその二カ所を
つなぐ優しい面が、場所により影を作り、場所により光を受けて照
り輝く様を、鼻息と音のする呼吸を伴って眺めた。とうとう我慢で
きなくなり下着をおろすと、腹に引っ付くくらいせり上がった陰茎
は、皮から少しだけ顔を出す亀頭の前から、透明で粘度の高い液体
を垂れ流すように漏らしていた。漏れた液を左手の人差し指で拭う
と、放物線に糸を引いたそれが月明りにぬめって光った。健雄は陰
茎を右手で握り、手首を柔軟に活用して上下に動かす動作をしなが
ら、尻の写真を眼球でなぞるように見て、桃の尻を重ねていた。彼
にとってあの女の尻は、目の前の白黒写真とは比べるべくもなく、
色鮮やかで人肌の温度を蓄えた完全形だった。

桃の尻を思い浮かべただけで、急激に昇りつめた健雄は、石一個
分しかない山の頂上に立たされているような、降りるのも、横にず
れるのめかなわなない窮地に追い込まれ、下腹部から押し寄せる悦楽
の波に、右手の動きを速め、左手を陰茎の先に添えた。

桃の尻を考えていたのに、ふっと、啓子の顔が浮かんだ。一旦顔
が浮かぶと消えることはなく、彼女は八重歯を光らせ、えくぼを強

調し、こちらが恥ずかしくなるほどの強過ぎる笑顔を見せつけた。
健雄は尻の穴に力を入れ、腹を引っこませて身がまえた。

悦楽の波が何度も到達し、皮の中に放出された黄色がかった白濁液の粘っこいだが、皮から漏れ出し左手の掌にぬらん、ぬらんと落ちた。温度を残している液体の塊を、もう訪れてしまった気怠さに包まれながら見つめていると、「精子は、どろどろに粘っこくなって、女の身体に残れるようにすんだっぺよ。それで卵子に会えるんだっぺよ」という級友のませた声が、鼓膜に引っかかってでもいたのだろうか、鈴虫の泣き声に混じって聞こえてくるように思えた。冷静になった健雄の脳裏に、啓子の笑顔はすっかりなくなってしまう。

翌日、学校から帰ってすぐに健雄が番台に座っていると、この前と同じように鯉男が桃女の肩を右腕で抱いて、左腕で暖簾を払い入ってきた。男は似たような濃紺の浴衣をまもっていたが、女は白地に黒で紫陽花が描かれた浴衣を着ており、健雄は浴衣の薄い生地から透ける女の肌を見ながら、鼓動が打つ「ボツ、ボツ」という音を聞いていた。女が二人分の料金を支払い、女湯に進む際に自分に目配せをしたのを確認して、健雄は「ボツ、ボツ」の音をより強く意識し、あたかもそれが自分とは関係がない場所から聞こえてくるように、はるか遠くに聞いた。

平日のこの時間はしばらく客が来ない。番台から脱衣する女の尻を見ただけでは飽き足らなかつた健雄は、頼まれてもないのに清掃を口実に女湯に入った。すぐに桃女が洗い場で身体を洗っているのを見つけると、彼女の背後でブラシをこすりながら、椅子に座る尻を盗み見、昨夜、これを思い浮かべて欲望を吐き出したことを教えてやりたい衝動に駆られ、健雄は全身の血液が下半身にたまってくる感覚に身を震わせた。しかし鏡越しに女と目が合ってしまった、その目が自分の考えを全て見通しているとも言いたげに、両の黒目をしっかりとこちらに向けているのを察知し、健雄は慌てて視線

を外し、女の側を離れて適当にブラシをこすらせた。女は両腕を上げて髪を洗っており、気持ちが良いほど反った背中が、背面の張りを石鹼の泡越しに艶めかせていた。

「何やってんだっぺな。女湯はもうやったっぺよ。男湯やれ」

祖母に叱咤され、健雄はブラシを抱えて女湯を出た。最後にもう一度桃の尻を見たかったが、後ろから桃女の眼差しが向けられている気がして、振り返る勇氣は出なかった。

男湯では、鯉男が湯船に浸かっていた。湯船の縁に両腕をかけて、胸から下を湯に浸けているので、背中の鯉が湯から顔だけ出しているように見えた。男の筋肉に沿って微妙な凹凸を有する錦鯉が、たった今湯から飛び上がってきたかのような錯覚にとらわれ、健雄は鯉の模様一つ一つを眼球に刻みながら、男の後頭部の傷と、右肩の縫ったような痕を、ゾッ、ゾッとブラシをこすりながら眺め、番台に戻った。

湯から上がった桃女の尻は、水を弾き、潤いをたたえていた。健雄は番台から、ほとんど視線を外すことなく尻が遊ぶように動くのを見つめた。桃女は手拭に水をさあっと吸わせると、まだ水滴の残っている肌に浴衣を羽織った。女が番台を通り過ぎる際、濡れた肌がうっすらと見えるのを伏し目がちに覗き、彼女が自分に目配せをするのを、恥ずかしさと、誇らしさを混合した感情でもって、健雄はどうにかこうにか受け止めた。

夕方六時を過ぎ、客足が増えた番台で客をさばきながら、今日二度目に見る桃と鯉に、健雄はつい驚きの表情を向けてしまった。二時間前には糊の匂いが心地良く、清潔だった女の浴衣は、だいぶ皺が刻まれ、何とかまとめられた髪も襟足が乱れていた。心なしか、肌の色も先ほどよりも濃い気がしたし、嗅いだこともない香が、女の肌から漂ってくるように思えた。

「今日は、暑いね。汗、かいちゃって」

女は目線を下に落とし、健雄と目を合わせることがせず、番台に二人分の料金を置いた。女の指は、骨にそのまま皮をかぶせたよう

に、細長いか弱さを強調していた。形の良い爪に並んだ規則的な線が、照明の光をためて輝いている様を、健雄は見た。男は坊主頭の後頭部を何度かかきむしり、足早に男湯へと消えていった。

客が多い時間帯だったので、他の客に紛れ、女が浴衣を脱ぐ様子ははっきりとは見る事ができなかった。しかし隙間から微かに覗いた女の尻に、赤く色がついていたことだけは、健雄は確かに盗み見ることができた。赤い色は尻の一番膨らんだ部分を中心に広がり、あたかも尻が恥ずかしがって赤面しているように見えた。そして熟していなかった桃が、熟れて食べ頃になったようにも、健雄には感じられた。さっき嗅いだばかりの彼女の体臭を思い出し、健雄は尻の赤みと、匂いをどうにかつなげようとしたが、二つはどうしても結びつかなかった。

梅干し、海苔、飯、汁。それが健雄の朝食の全てだった。たまに漬物に加わることもあるが、せいぜいそのくらいの変化に過ぎず、おかずに魚が入ることなど、年に数回程度、しかも魚とは言っても夕食の残りなので、ほとんど骨と皮ばかり、食べる場所など余り残っていなかった。

祖父と健雄が食べた後の梅干しの種を、祖母はご飯に乗せ、お茶をかけて流し込んだ。明治二十年代生まれの二人は食事中一言も話さず、ただ黙々と、品数の少ない朝食を咀嚼した。ご飯粒一粒でも残すと祖母に叱責された。「戦争の時は、飯なんて食えなかったんだぞ」それが祖母の口癖だった。戦争が終わって十五年経つ今、そんなことを言って何の意味があるのだろうか、健雄は思ったが、口応えはしなかった。健雄を叱るのはいつも祖母で、祖父は自分からしゃべることをせず、黙々と食事を、仕事をするだけだった。

日曜日、まだ銭湯が開く前の時間に、近所の空き地でキャッチボールをする父子を、健雄はじっと見つめることがあった。健雄よりも少し歳が下の少年が、顔を喜びで一杯にして、父親に向かって球を投げていた。硬球が革のグローブに打ちつけられる度に、少年の

汗が粒となって空気に飛んで落ち、健雄は自らの背中に球を受けているような気持ちになり、普通に呼吸をするだけでも苦しむくらい胸の奥深くが痛んだ。そういう時、健雄は決まって道端の小石を握り、振りかぶって投げた。小石が砂利道に無機質な音を立てて落ちると、すかさずキャッチボールをする父子の笑声が聞こえてくる。健雄は通行人に怒られるまで、次から次に絶え間なく小石を投げ続け、無機質な音をずっと耳に聞き続けた。

祖父母の部屋の隅にある仏壇に、父の遺影が飾ってある。顎を引き背筋を伸ばす軍服姿の父は余りにも凛々しく、健雄はそれができるだけ目に入らないように気を付けた。かつて父が使っていた、父の垢がついているという下駄を、そろそろ履けるだろうと祖父に勧められても健雄は決して履こうとしなかった。

夏休みに入る前の最後の週、国語の授業で健雄は教科書を忘れた。忘れ物は珍しいことではなく、むしろしょっちゅうしていた。ノートだけを広げ、教師の話す言葉を一生懸命聞いているふりだけをして、健雄は見かけだけ真剣に鉛筆を走らせていた。

啓子。啓子。啓子。

何か書かなければ授業を聞いているふりはできないから、健雄はノートの隅に右隣の少女の名を書いた。

福田啓子。福田啓子。増渕啓子。

彼女のフルネームを二度書き、次に名字だけ、自分の名字にしてみた。

「たっちゃん。一緒に見よう？」

突然、啓子から声がかかったので、健雄は慌てて今書いていた落書きを消した。教科書を忘れた時、自分から見せてとお願いするとはまづなかったが、啓子は彼の気持ちを全て察しているかのよう

に、進んで二人の席の間に自分の教科書を広げてくれるのだった。

「う、うん」
どもりながら答え、右目の端で啓子を見ると、彼女は八重歯を白

く覗かせ、健雄の顔を透かし見るように笑っていた。健雄はすぐに目を自分の机に戻した。汗が耳の後ろを流れ不快だったので、左手の親指の腹で滴をすくい、右手の甲になすりつけた。教科書の右端を押さえる啓子の指は、細く、驚くほど華奢で、爪もやたらこじんまりとしていた。健雄は啓子の指を横目で捉えながら、桃の女の指と、二つの指をまぶたの裏側で並べてみた。啓子の指は、桃の女の指よりも一回り小さかったが、自分の太く短い指に比べれば、どちらも全く別の社会か、階級に属するとは思えなかった。虫臭い匂いを振りまいて抵抗するカブトムシをつかむことも、道端の小石を投げつけることもするとは思えなかったし、まして欲望をため込んだ陰茎を、荒い息を吐きながら握って上下に動かすことなど、二人の女らしい細い指にはとても成しえないと思った。しかし健雄は、桃女と鯉男が二時間置きに風呂に入りに来たことを思い出し、自らの太く節くれだった、体育の授業で土がついたままの指を見、もう一度啓子の白い指を、自分と違って垢がたまっていない透明な爪を、教科書に顔を向ける視線の先に眺めた。

「あつ、ごめん」

教師が話すのに応じて教科書をめくる時、指の土をページにつけてしまい、健雄は謝った。

「ああ。いかんべ。でもたっちゃん、手え洗わないと、駄目だよ」啓子はまた八重歯を見せた。雲の多い空から一瞬指した日差しが、八重歯を照らしてキラッと鋭く光った。小学校から九年間、ずっと一緒だった幼馴染の啓子は、学年トップクラスの成績だったから、宇都宮女子高、通称宇女高に進学することがほとんど決まっているようなもので、もう半年と少しすれば啓子と離ればなれになることは、確実に決まっていた。

一年前の夏、給食を食べ終わって、昼休みの空いた時間に信一と理科室に忍び込んだ。誰もいない理科室の端で静かに息をしながら、汗を額に背中のにじませて、健雄と信一は声を小さく話していた。

「健雄、六組の高橋恵美子、知ってっか？」

「ああ。髪が短い、活発な子だっぺ？」

「目がくりくりしてて可愛いんだ」

「信一、おめ、好きなんけ？ 高橋のこと」

「ああ。好きだ。悪りいか？」

「いや、悪くはねえけんども」

「おめも、教えろ。好きなやつ」

「嫌だ」

「教えろ。ずりいぞ」

「……」

「教えろよ」

「啓子だ」

「福田か」

「ああ」

健雄は信一に、啓子への思いを、ありったけ正直に伝えた。二人はお互いの秘密を胸に秘めた。生まれて初めて共有した秘密は、無性に誇らしかった。健雄はこの時初めて、親友という存在について考えた。信一の欠けた前歯に何故だか強く親しみを感じ、その暗がりの奥に何が見えるのか、彼に会う度に凝視するようになった。

堀の縁に腰をかけて、拾った細い竹に紐を結わえ、するめを餌に健雄は釣り糸を垂らしていた。戊辰戦争の時に焼けた城はとつくに跡形もなく、ただ堀の跡だけが、水をためて残されている場所だった。堀沿いの柳が作る影に隠れるように、アメリカザリガニが赤い身体を水中に沈めてじっとしているのを、健雄は狙いをつけていたが、やつらは中々その大きなはさみで、するめをうまい具合に挟んではくれなかった。釣れれば塩茹でにして、胴体から腹を抜き、背わたを取って食べる。海の遠いこの地域では子どもたちのおやつとして親しまれた味だった。

「釣れねえなあ」

独り言を言って、健雄は水からするめごと糸を抜き取り、そのま
ま後ろに振りかぶって水中に投げ込んだ。水が弾け、ザリガニは一
斉に腹を丸め、後ろ向きに水の中を逃げた。泥が舞い上がる様を見
て、よそってしばらく経った味噌汁を箸の先でかき混ぜる時のこと
を思い出した。健雄は右に左に、するめを水に入れたまま力づくで
振り、泥を余計に舞い上がらせて水中を濁らせた。

「そんな、乱暴しちゃだめだぜ」

聞き慣れない東京弁に振り返ると、日傘を差した桃女と、彼女に
色無地の袖をつままれた鯉男が、笑いながら逆光に黒光りして立っ
ていた。鯉男がてっぺんまで昇った太陽を顔の半分を受け止めて、
笑顔はやたらとまぶしく映った。

「あら。お風呂屋さんの坊ちゃんだね」

桃女が続ける。健雄は「お風呂屋さん」とも、「坊ちゃん」とも
呼ばれたことがなかったから、彼女と会話できる機会が巡ってきた
というのに、気恥ずかしさで一杯になってしまった。「銭湯のせが
れ」健雄は近所の大人たちにそう呼ばれていた。

「いいかい。ちょっと貸してみろ」

鯉男は健雄の手から竿を取った。良く日焼けした腕は、筋肉の膨
らみが、段差を作って盛り上がっていた。指はドツリドツリと節が
目立ち、健雄の指よりもずっと太く大きかった。右手一本で竿を握
る鯉男の指を見つめ、五本揃っていることを確認し健雄は何故だか
無性に安堵した。しかし健雄の位置からは良く見えない鯉男の左手
は、あたかも意図的に隠しているようにも思え、健雄は再び鯉男の
右腕に視線を戻した。和服の袖から少しだけ覗く刺青の桜が、異様
に桃色を鮮やかに咲かせ、竿を握る腕に入れる力を変化させる度
に波打って花びらがなびくのを、健雄は黙って見つめていた。

「こうやって、やつらの目の前で少しずつ、餌を動かすんだよ」

そう言いながら鯉男は、微妙な力加減でもって手首を震えるよう
に動かした。そうこうしていると、おびき出されたザリガニの大き
な一匹が、はさみでするめを挟んだ。

「食いついても、すぐに引き上げちゃだめだ。逃げちまう。ちょっとずつ、ちょっとずつ引いて、それでも逃げないのを確かめて、一気に引き上げるんだ」

鯉男は言葉通り、二、三回竿を引き、ザリガニが食らいついているのを認めると勢いをつけて竿を振り上げた。するめと一緒に大きな赤いアメリカザリガニが吊り上がり、振られて土手に転がると、はさみを頭上に上げて三人を威嚇した。

「釣りは、女と一緒にだ。小さい餌をいくつかやって食いついたところで、モノにすんだよ」

「ちよつと、あんた」

歯を見せて笑いながら話す鯉男の背中を、音が出るほど桃女が叩いた。健雄は鯉男の言うことの全てが理解できたわけではなかったが、その一部でも分かった気になったことが、たいそう誇らしく思え、同時にとても恥ずかしくなった。

「それにしても、うまいねえ、あんた」

「昔、良く釣ったもんだよ。あの頃は食うもんがなかったからな」釣り上げたザリガニに視線を向け男は話したが、その口調は懐かしむというふうには聞こえなかった。男は続いて、水草に隠れるウシガエルを見たようだが、その眼差しには触れてはいけない、一種の脆さを秘めているように思えた。ウシガエルの濁ったとどろく鳴き声を、鯉男は無言で聞いているようだった。

振りかざすはさみを両手で押さえつけ、鯉男はザリガニの背中を健雄に握らせた。健雄はあらかじめ拾っておいた、蓋の空いた空き缶の中に、そいつを放り込んだ。

「たくさん釣れたら、ご馳走してくれよ」

鯉男のヤニがついた歯が、陽光を反射して鈍く光った。健雄はうなずき、ザリガニの入った空き缶を持ち上げた。驚いたザリガニが、空き缶にはさみを打ちつけて軽く高い音を立てた。

「坊ちゃん。スパゲティって食べたことあるかい？」

健雄はズズズと首を振り、ついでに顔中の汗を吹き飛ばした。

「作ってあげるよ」

桃女はそう言いながら唇の端を軽く持ち上げた。白粉の乗った肌が、夏の太陽とは無縁としか思えないほど淡かった。おいそれと触ることを許されない、健雄とは遠い場所に存在する、神聖な物に思えた。

「ついてきな」

健雄の肩に左腕をまわし、鯉男は言いながら歩き出した。桃女が、鯉男の右隣から横目で二人を交互に見ながら、うつすらと笑みを浮かべて太陽に向けて日傘の角度を変えた。干上がるような猛暑が不思議と、三人で歩く道中では少しも気にならなかった。鯉男の腕にじむ汗の粒が、大人の匂いでもって自分の肩や首筋に移ってきて、健雄は言いようのないもどかしさとくすぐったさを感じていた。

桃女は畑の前を通る度に、形の悪いトマトとか、シソの葉とか、ニンニクのかけらとかをもらっていった。彼女が愛想を振りまくと、土で薄汚れた農家の男たちは、快くそれらを彼女に渡した。頼んでもいないのに、キュウリやナスをもらう時もあった。農家の男たちが見せる前歯が、日焼けと土に汚れてくすんだ顔に、白過ぎる光沢を目立たせた。

「それ、臭えんじゃねえけ？」

「スパゲティには、ニンニクがなくちゃいけないんだよ」

笑いながら、桃女はニンニクの一かけらを指の先につまんだ。健雄はそれを口にしたことがなかったし、祖父母からは、食うもんではないと言われていた。

「この姉さんはな、イタリア系米軍将校のオンリーだったんだよ」
「ちやかすように言う鯉男に、「あんた」と、健雄が聞いたこともない厳しい口調を桃女は投げた。健雄は桃女の尻を浴衣越しに見て、その米軍将校はこの尻をどのように扱ったのか想像したが、すぐに虚しくなったのでやめた。

桃女と鯉男のアパートは、堀からは徒歩十分ほど、人通りの比較的多い通りに面した場所に立っていた。二階建てで、外壁に塗られ

た漆喰の茶色が、真夏には暑苦しく感じられた。二階の部屋に入ると、八畳の居間と、襖が閉められていて見えなかったが、奥に寝室があるようだった。桃女はギゴ、ゴドと音を鳴らしながら、二ヶ所の窓を開けた。入りこんでくる風はあまり涼しくはなかったが、窓から窓に風が部屋を抜けていくので、汗もいくらかはひいた気がした。

健雄は台所に立つ桃女を見ていた。とても食物とは思えないニンニクをどう料理するのか、気になって仕方がなかった。しかし彼の目線はいつの間にか、包丁を持つ桃女の手元ではなく、手の動きに合わせて揺れる尻に、向けられていった。

「なあ、いい尻だろう？」

チェリーに火をつけて煙を吸っている鯉男が、健雄の視線の先に気付いて、囁くように言った。見ているのがばれてしまったことよりも、自分が羨望を抱いている対象が、大人の男にとってもやはり魅力的な物だと知ってしまったことに、健雄は色んな感情をごちゃ混ぜにして整理しきれず、鎮まった汗をまた流し出した。

「坊ちゃん、ザリガニをさばくの手伝っておくれ」

呼ばれて健雄は台所の、桃女の右隣に立った。塩茹でにされて赤く固まっているザリガニの尾を引き抜き、殻をむき、背わたを丁寧に取った。ふと桃女の方を見ると、浴衣の胸元が開いており、右側に立っている彼の方からは、ちょうど豊かな乳房の膨らみが見えてしまった。桃女がザリガニの身を包丁で切り刻むのと全く同じ動きで乳房が弾み、健雄はそれを飲み込むようにじっとりと見ていると、いつの間にか手伝いが終わってしまって居間の真ん中に置いてあるちゃぶ台に戻った。

「もう、覚えたんか？」

チェリーの二本目を吸っていた鯉男が、煙草を持っていない左手で細長い物を握る形にし、それを上下に動かす動作をした。「え……」とだけ声に出し、健雄は下を向いて黙った。

「ちよつとあんた、変なこと教えるのは、よしてよ」

フライパンをふるいながら、桃女が背中中忠告を投げた。鯉男は、「もう、皮はむけたか？　まだか？」と一層小声で、健雄の肩を抱くように腕をかけて言った。それでも健雄は答えられず、黙ってうつむくばかりだった。台所からは嗅いだこともない匂いが、蒸して熱のこもった部屋に満ちていた。鼻を刺激する匂いがニンニクのせいなのか、イタリア料理の味付けなのか、健雄は下を向いて言葉を発せず、ただ鼻だけを動かして感じようとしていた。

出来上がった料理は、皿に三人分に盛られていたが、桃女の分がやたらと量が少ないのが不思議だった。大人なのにこれしか食べないのかと、自分の前に置かれたそれとの量の違いを何度も見比べた。スパゲティは麺料理で、細いうどんのような形をした麺の上に、トマトで作ったのだらう赤いたれ、更にその上からシソの千切ったのがかけられていた。

「ザリガニのトマトソースだよ。泥臭いかもしれないと思ったから、ニンニクを多めに、シソも振ってみたよ」

桃女の説明が終わらないうちに、向かいの酒屋から冷えた瓶ビールを持って戻ってきた鯉男が、ビールの一杯を一口で流しこんだ。

「うめえ。お前も、飲めよ」

鯉男につがれると、桃女もグラスに口をつけ、ゆっくりと飲んだ。グラスに添えられた両手の指が、白くて細いので、冷えたグラスに似合った。焼酎を飲んでいる祖父しか見たことがない健雄にとって、黄色い色と白い泡の液体は新鮮だった。ちよつと飲んでみるかと鯉男に言われてほんのちよびつとだけ飲んでみたが、苦さ以外は何も分からなかった。

「坊ちゃん。スパゲティは、こいつで食べるんだよ」

桃女に手渡されたそれは、三又に分かれた、金属だった。

「こうやって、巻いて食べるんだよ」

その金属で麺を巻き込み、桃女は口の中に入れた。音を立てずに、静かに食べる姿は、見たこともない異様な美しさがあった。

「そんなもん使う必要はないんだよ。箸でも食えるぜ、坊ちゃん」

鯉男は音が出ることも気にせず、うどんか蕎麦を食べるように箸で麺をつかみ、すすって食べていた。健雄は三又の金属で、桃女がしたように麺を巻き込み、無理をして食べた。苦さと生臭さに嫌な刺激を覚え、脂っこさもあまりなじめなかった。

「どうだい？」

「……」

「遠慮はいらないよ。正直に言ってごらん」

「……あんまり、うまくない」

「あら」

桃女は舌の先を少し出し、目尻を細めた。健雄は舌に残る、しびれるような刺激が気持ち悪く、水を多めに飲んだ。口の中に残った違和感は水を飲んだくらいでは中々消えなかった。

「この油はね、オリーブっていう木の实から作っているんだよ」

言いながら桃女は酢を数滴、自分のスパゲティに振りかけた。健雄は真似をし、酢を振ってみると、しつこさがだいぶ緩和されて食べやすくなった。健雄は三又の金属を箸に持ち替え、鯉男の真似をするかのように勢いをつけてすすった。それを見て鯉男が、声を立てて笑った。

白い野良猫が一匹、台所の小窓から顔を出した。桃女がザリガニの残骸をやると、猫は丸まってやけに行儀よく咀嚼し始めた。猫の背中をなでつける桃女を見ながら、健雄はスパゲティを食べた。つるつると滑るので箸でつかみにくく、何度も落としては汁を飛ばしてランニングを汚した。

「あいたたブンブン あいたたブンブン」

聞き覚えのある一節に、健雄はびっくりして桃女を見たが、聞き取れたのはその部分だけで、後は小さくほとんど鼻歌に近い声だった。健雄は猫をあやす桃女の歌声が聞こえないように、大きめに音を立ててスパゲティをすすり食った。

銭湯が月に一度の点検で休みの日、健雄は信一に呼ばれて彼の家

に行った。「すげえもんが見られっぞ」何事も誇張する信一の言うことを真には受けなかったが、雨が降っていて虫捕りはできないので、どうせすることもなしと彼の誘いに応じた。信一の家は狭いが一応二階建てで、父は役所、母は和裁の学校に勤め、高校生の二人の兄は毎日野球部の練習で帰りが遅かった。

「なあ、すげえもんって何だっぺよ」

健雄の問いに、信一は無言でにやけるだけで答えなかった。二人はもう何度も読んだ貸本漫画をめくり、ほとんど無駄としか思えない過ごし方で時間をつぶした。二階にある信一の部屋の窓に、斜めにずっと雨粒があたっており、いつまで経っても変わらない速さで音を奏でていた。

「おい、そろそろだ」

信一は便所のちり紙を何枚か持ってきて、部屋の窓際に向けて、腰をおろしたまま進んだ。健雄は訝しがりながらも後に続き、信一の真似をして目だけ窓枠から出し、外を見た。降雨で曇る先に、向かいのアパートの一階の部屋で、裸の男と女が、抱き合ってもつれ合っていた。男が上に乗って後頭部をこちらに向け、仰向けに寝かせられ足を大きく開いた女を、前後に揺るように動いていた。顔を下に向けているので男の顔は見えなかったが、女は、苦痛に顔を歪めるように、一目で苦しそうと分かる表情をしていた。

「あそこの家の亭主は、工夫だっぺよ。雨だと仕事が休みになっから、夕方にはおっぱじめんだよ」

信一の声を耳に入れながら、雨に隔てられた光景を凝視していると、女の表情がより苦しそうに、脆く歪んでいくように思えた。健雄は、男と女が営むその行為が、非常に気持ちが良いものだと思われていた。しかし、つい数メートル先で実際に行われているその行為は、気持ちが良い物とは到底思えなかった。目の前で女にこんな顔をされては、自分はとてもそれを楽しむことなんてできないと感じた。少なくとも啓子が、自分の下になって目の前の女のような表情をしたら、健雄はすぐさまその行為をやめてしまえると、自信

を持って言えた。

信一はいつの間にかズボンと下着をおろし、陰茎を出していた。堅くそそり立ったそれは、先の、松茸の笠に似た薄く桃色があった部分が完全に露出していた。陰茎を握って上下にこすり、信一は息を荒く顔中から汗を噴き出していた。目を窓の外に戻すと、女が何かを叫んでいるのか、目を固く閉じたまま口を大きく開けているのが見えた。女の絶叫の声が全く聞こえてこない雨足の強さが、健雄にはせめてもの救いに思えた。しかし、雨音の切れ目から漏れるように届いてしまう信一の獣じみた声と、絶え間なく続く肉をしごく音に、健雄は耳を塞ぎたくなった。

「恵美子、恵美子お」

信一のうめきは雨音に負けじと、どんどん強くなっていった。あんなに苦しむ女の顔を見ながらどうして好きな女のことを考えられるのか、健雄には理解できなかった。

「なに、してるの？」

学校帰り、公園に植えられた木の根元にしゃがみ込む健雄は、背後からかけられた声に振り向いた。聞いた時にそうだろうと思ったが、声の主はやはり啓子だった。中学校から二人の家に向かう少し手前にある、ブランコが一つとベンチが二つあるだけの公園だった。「蟬の、幼虫だっぺ。木に辿りつけないで、うろろうしてたのを、この木の幹にくっつけてやった」

啓子は健雄と同じように腰を下げ、彼が指さす先にある、大きな楠の根元を見た。しゃがみこんだ目線のちょうど先に、茶色い虫が樹皮にへばりついていていた。目が真っ黒で、茶色の皮の裏に、青白い羽根が透けて見えた。

「いつまでも地面を這ってつと、鳥や蟻に食われたり、体力がなくなつて死んじゃうんだ」

健雄の言葉を聞いて、啓子はうなずいた。彼女がちらっと自分を見たのが、健雄には分かった。放課後、手を伸ばせば触れられる距

離に啓子がいるのはいつ以来だっぺ。小学校の時は、二人は何も深く考えずに遊ぶ仲だったが、いつからか、学校以外で会うことはほとんどなくなっていた。前かがみになっている啓子のブラウスの胸元から、乳を押さえる薄い桃色の下着が少し見えてしまつて、健雄は額から垂れてきた汗が、眉毛の根元にたまつたのを感じた。桃女ほどではないにしろ、急に女らしく、身体に丸みを帯びてきた啓子の体臭は、熟れる前の果物の香りに似ていた。カブトムシが間違つて啓子の身体につかねえかな。そんなことをぼんやりと考えながら、健雄はすぐ隣の啓子を少しでも多く感じとろうと、鼻から一杯、長く息を吸い込んだ。

昨日の蟬が気になり、翌朝六時前に公園に行つて健雄は、そこに啓子の姿を見つけ驚いた。彼女は健雄を認めるとえくぼをへこませながら、「ちゃんと蟬になれたよ」と笑つた。楠の、彼らの背を少し越すくらいの位置で、すっかり翅も茶色に色づいたアブラゼミは、あとは飛び立つただけだと、早朝のまだ温まっていない空の様子をうかがっているようだった。二人は特に言葉を交わすこともなく、蟬を見上げながら並んで立つた。息が吹きかかると蟬は驚いたように身体を震わせるので、健雄は口元を手で覆つた。

「たっちゃん、優しいね」

啓子が健雄の方を振り向くと、肩よりも少し伸びた直毛が、風になびいて柔らかく揺れた。彼女は学校ではいつも一つに縛つていたから、健雄は軽やかな髪の毛の動きに、動揺して返す言葉が出なかった。彼女の丸い瞳は黒目の部分が大きく、長くて量の多いまっげが上向きにくるんと巻かれ、ちりでも何でも掴んでしまうように見えた。厚くはない唇は横に大きく開かれ、八重歯が光沢を帯びていた。健雄は右手の甲で額の汗を拭つた。

「これ、使つて」

きれいに折り畳まれたハンカチを差し出す啓子に対し、「汚しちまうから」と断つたが、彼女は健雄の額と首筋の汗を自分で拭いた。力はほとんど入れられていなかったが、ハンカチを通して彼女の指

が触れる度に、健雄は血管に熱湯を注がれるような発熱を覚えた。

「たっちゃんの汗っかき、昔から変わってないね」

啓子が笑うと吐息が、ちょうど肩の辺りに弱く吹きかかった。ついこの前まで同じくらいの背の高さだったのに、自分の方が明らかに高くなったのを今さらながら強く意識した。

「ハンカチ、洗濯して返すから」

健雄が言い終わるのとはほぼ同時に、蟬が、意を決したのか翅をこすらせる音を鳴らしながら、空に飛び上がっていった。二人はしゃべるのを止め視線を同じ方向に定め、蟬が小さく点になって消えていくのを見つめていた。後には背中から割れ、空っぽになった抜け殻だけが、楠の幹に何も言わず残されていた。

桃女と鯉男は週に三回、銭湯を訪れた。その度に、健雄は桃のような尻と、鯉の彫り物を眺めた。夜、祖父母が寝静まってから、陰茎を小刻みに刺激している時、三回に二回は桃女の尻や厚い唇を、残りの一回は啓子の笑顔や、膨らみかけの乳房を思い浮かべていた。もう我慢が出来ないと耐えるのを諦め、快楽の頂点をたった一瞬堪能する時、健雄は「啓子」と名を呼んだ。桃女を想像しながら行為をする日であっても、呼ぶのは啓子の名だった。しかし頂点を越してしまうと後には虚しさが勢いよく押し寄せてきて、飛び散らせた残骸の後処理を、罪悪感を胸に抱かせながら行わざるを得なかった。

ある時など、男湯の床にブラシをかけていて鯉男の陰茎をまともに見てしまい、その大きさに驚愕したこともあった。平常時でこれだけ大きければ、興奮して勃起すると一体どんなに太く巨大になるのか、そんなに立派な物が桃女の中に入るのか、健雄は到底信じられない気持ちでもって鯉男の一物をちらちらと見た。特にすごいのが先の部分の逞しさで、造り物としか思えないほど笠が張り出し、竿との間にはくっきりと段差が際立っていた。その段差の高さを測るように見ていると、勝手に手足が震えてしまい、握っているブラシが軽い音を立てて鳴った。そしてあの雨の日、信一と一緒に見た

階下のアパートの女が、性行為を行いながら苦痛に耐える表情をしていたのを思い出し、その痛みが自分にまで伝わってきている妙な感覚になった。

夏休みに入り、梅雨がすっかり明けきった夏の太陽は怒っているかのように日差しを突き刺してきたが、一日中を遊びにあてても構わない身分となった子どもたちにとって、陽光の強さなど少しも気にならなかった。健雄は朝から信一とカブトやクワガタを捕ったり、ザリガニ釣りをしたり、長い休みを目いっぱいに使って謳歌していた。

「あら。坊ちゃん」

七月の終わり、その日は昼から用事がある信一と、昼までザリガニ釣りをして別れ、ふらふらと健雄は家へ向かっていた。いつかと同じように日傘を差した桃女と色無地の鯉男が、大通りを健雄の家の方向に少し入った辺りで声をかけてきた。

「夏休みか、いいな」

鯉男はそう言ったが、健雄には、彼の方がよっぽど羨ましく映った。どんな仕事をしているか知らないが、平日の昼間から桃女と歩いているのを良く見かけたからだ。健雄の父親代わりの祖父は、月曜から土曜まで一日中働き、銭湯が休みの日曜はボイラーの点検やら風呂場の掃除やらでやっぱりずっと働いていた。だからこそ苦勞をしながら稼いでいるようには見えない鯉男が、どうやって飯を食っているのか分からないが悠々と生活しているのが羨ましく、健雄は大人になったら銭湯などは決して継がず、鯉男のような生き方をしたいと思っていた。

「今日は、三匹捕れたっぺよ」

アルミのバケツを持ち上げ、健雄は堀で捕まえた収獲を見せた。「上達したなあ」と喜ぶ鯉男の顔を見ると、頭をトツトツとなでられていような気がしたが、しかし強い高揚感が襲った。

「坊ちゃん、またスパゲティ、作ってあげるよ」

桃女はそう言ってくれたが、健雄は前に食べたスパゲティが、正直に言えば口に合わなかった。ザリガニは味噌汁にした方がずっとうまいと思っていた。

「安心しな。今度はあっさりした、和風のを作ってあげるから」
健雄の心の内を見透かしたかのように桃女が言うのを聞いて、健雄は何だか恥ずかしくなったが、悪い気分ではなかった。それに、例えまづかったとしても、また桃女を作る西洋料理を、食べてみたかった。食べてみたかったというより、三人で食事をするその場に、堂々と身を置きたかった。

アパートに着くと、桃女は台所に立ち、健雄は彼女の右側でザリガニさばきを手伝い、鯉男はチェリーをくゆらせた。健雄は桃女の胸元と尻をたっぷりと見て、彼女の体臭を匂った。啓子の体臭が熟す前の果実なら、桃女のそれは、もっと刺激があり、匂いの方から鼻の粘膜に張りついてきた。鯉男は、桃女の肌に押しつけるように顔をつけ、この匂いを嗅いでいるのだろうか。そう思いながら健雄は、意識を集中しながら鼻を動かし、まるで鼻が意志を持っているかのように桃女の匂いをじっくりと嗅いだ。

「坊ちゃん、冷えた飲みもん買ってやるから、向かいの酒屋に行こう」

料理が出来あがる頃合いを見越して、鯉男が健雄を外に誘った。向かいの酒屋で、鯉男は瓶ビールを二本買い、健雄はラムネを一本買ってもらった。氷水で冷やされたラムネは、冷水の粒を瓶の外側に沢山つけており、健雄は頬をなすりつけ、冷たさを堪能した。

「まだ、むけてねえか？」

健雄は無言でうなずいた。

「毎日、少しずつむいてくんだよ。そうすると、自然と皮が伸びて、むけてくるぞ」

鯉男の方を見ると、一重の切れ長な瞳がジレジレと、健雄に熱い視線を送っていた。鯉男の背後で蜃気楼が、息苦しく視界を曖昧に立ち昇らせていた。

「俺も、十五の時だぜ。むけたのは」

そう言ってアパートの階段を上がる鯉男の背中を、健雄は見つめて、彼が両手に持ったビール瓶から汗のように垂れる水滴が、太陽の光を受けて反射して輝くのを、無言の目線で追った。

桃女が作ってくれたのは、彼女の言ったとおり、醤油を使ったスパゲティだった。麺の上に醤油で炒めたザリガニの肉が乗り、しそとゴマが振りかけてあった。

「うめっ」

最初三又に分かれた金属で上品に食べていた健雄は、すぐに箸に持ち替え、かき込むようにすすり食った。脂っこさは余り感じず、少し癖のある細いうどんに思えた。桃女はその様子を見るとふりと小さく笑い、「坊ちゃんには、和風が合うんだね」と独り言のように言った。健雄が皿に盛られた彼の分を一気に平らげてしまうと、桃女は自分の皿から彼の皿の一部を移して食べさせた。既に食べ終わった鯉男は、二人のやり取りをゆっくりと眺めながら、煙草を吸うのとビールを飲むのを交互に行っていた。

「あちい」

鯉男は短く一言だけ言って色無地を脱いだ。禪一丁になって汗ばむ肌を露出し、鯉男は団扇を大きく煽いだ。大人の男の匂いが、団扇の風に乗って部屋をゆっくりと埋めていった。

「ちよっと、坊ちゃんに目障りだよ」

桃女の忠告にも耳を貸さず、鯉男は裸のままでどんどんビールを空けていった。健雄は鯉男には知られないように、鱗の形から桜の花びらの数まで覚えるように盗み見た。健雄にとって、入れ墨は鯉男とは違う脳を持った生き物だった。今は鯉男の背中や腕に住んでいるが、いつか他の身体に移動して、何十年経ってもずっと生き続けると思えた。鯉が今住んでいる腕は太く、胸は厚く、自分の物とは余りにも異なっていた。健雄は自らの背中を見、匂いを嗅ぎ、鯉男の匂いとは違った質の汗臭さに、今日の暑さとは不釣り合いな寂しさを感じた。

その夜、健雄は鯉男に言われたとおり、陰茎の皮を、無理矢理少しむいた。鮮やか過ぎる桃色をした、尻の割れ目に似た先が見え、その部分に触れてみると、傷口を突かれるような嫌な痛みを感じた。健雄は恐ろしくなり、すぐに皮を元に戻した。

次の日、蟬を助けた公園に啓子が一人でいるのを、健雄は見た。蟬が飛び立った楠の前に立ち、まだそこに残るであろう抜け殻を、じっと見つめているように見えた。彼女は薄い青色の、ちょうど夏の空に似たワンピースを着ており、ワンピースから伸びる白い手足がか細くてまぶしく、健雄はしばらく遠巻きに見てから、声をかけようと近付いた。そして気付いた。啓子は、うっすらと瞳に涙を浮かべ、拳をゴニツと握っていた。声をかけるのを躊躇していると、健雄の気配に感づいた啓子の方から、話しかけてきた。

「たっちゃん。話が、あんだけど」

「なに」

ぶっきらぼうに答えることしかできなかった。二人はどちらから言い出すわけでもなく、二つ並んだブランコに腰をかけた。鎖から錆びた金属の臭いが、猛暑に焼かれて腐ったように漂ってきた。話があると言いながら、啓子は中々口を開かなかった。地面の砂の一粒をじっと見据えているのか、視線を落としたままだった。瞳からは涙が消えていたが、彼女の眼球が、何かとてつもない力によってその場所に固定されているかのように思え、健雄はただじっと、啓子の唇が開いて言葉が発せられるのを、首をじゅんじゅんと焼かれながら待っていた。

「信一くんと、仲いいでしょう？」

熱せられ、こもり過ぎた空気を切り裂いたのは意外な一言だった。

「ああ。いいけども」

「信一くん、六組の高橋さんのこと、好きなんだって」

「そうか」

勿論、健雄は信一が高橋のことを好きだと知っていた。しかしそ

れは二人の秘密だったから、知らないふりをした。

「高橋さんが、好きなのに、信一くん、高橋さんのことを考えながら、一人でいやらしいことするんだって。好きなのに、だよ？」

健雄は信一の速い息遣いと、一物をこする規則的な音を耳の奥に聞いた。

「そんなの、好きって、言わねっぺよ。欲望の対象としてしか、見てねっぺよ。気持ち悪い」

珍しく、啓子が強く訛りながら言った。健雄は信一がどんな気持ちで自慰するかを思った。快楽のために、欲望の赴くままに行われたとしても、それは彼の、高橋恵美子に対する情熱だった。例えば拾った成人雑誌に載る、女の裸を見ながらであっても、向かいの若夫婦が営む行為を盗み見ながらであっても、彼が情欲を高まらせ、必死に堪え、とうとう我慢し切れずに力尽きるのは、高橋恵美子のためであった。健雄はそのことを良く知っていた。知り過ぎて心が苦しくなるくらい、良く知っていた。

「俺も、するっぺ」

「え？」

「啓子のこと、考えて、俺もするっぺよ」

そう言い終わった後の、自分を見る啓子の顔を、健雄は直視できなかった。まるで崩れていくように、啓子は表情を壊していった。怒りと、蔑みと、恐怖をないまぜにしたような、ごちゃごちゃの感情を一まとめに表していた。眉間に刻まれた深い皺が、襲いかかってくるようで、健雄は思わず顔を背けた。啓子は地面を蹴り込むように立ち上がり、健雄の側から少しでも早く遠ざかりたいがごとく、公園の出口に向かって走った。ブランコが暴れるように揺れ、鎖がきしむ音が気持ち悪かった。啓子のワンピースの裾が、彼女の感情とは関係がないのか、ひらひらと風に気持ち良く舞っていた。

その日、健雄が家に戻ると、信一と成人雑誌を拾った日に帰ってきかたカブトムシが、虫かごの中で交尾していた。オスがメス

を無理矢理押さえつけ、尻から赤黒い器官を出して、メスの尻に突き刺していた。メスは二本の前足を宙に浮かせ、助けを呼ぶように動かし続けている。オスはそんなメスには構わず、頭がおかしくなつたのか小刻みに全身を振動させ、メスの背中を抱え込んで尻を押しつけている。健雄は二匹の虫が出す、身体の一部をこすり合わせる音をじっと聞いていた。

銭湯が開くまでまだ時間があつたので健雄は外に出た。日差しの照り返しが強烈に襲いかかってきて、胸くそが悪く唾を吐いた。ふと顔を上げると二人の若い男女が、手を握り合い、ちょうど健雄の脇を通り過ぎるところだった。楽しくて仕方がないのだろう、小さく爆発する笑い声が、むさ苦しい空気を弾けさせて、そのかけらを健雄の顔の側まで無条件に放ってきた。六組の学級委員長、阿部幸治と同級の高橋恵美子は、同じ学年の健雄を視界の隅っこにも入れず、二人だけの空間を少しも壊さずに健雄のすぐ横を通り過ぎていった。

「恵美子、恵美子お」信一の声がより一層情けなく、健雄の後頭部から脳味噌の奥にかけて、いくら振り払おうとしても容赦なく潜りこんできた。

銭湯の馴染み客の一人から、啓子の一家が東京に引っ越すことを知らされたのは、八月に入ってからすぐ、鳴く蝉もツクツクボウシがちらほらと目立つようになってからだった。あと一ヶ月ばかり続く夏休みの、まだまだずっと先だと思っていた最後の日が、いきなり目の前に訪れてしまったような衝撃に襲われた。健雄はその事実を告げてくれた客を男湯に見送りながら、やかましく鳴き叫ぶ蝉の声を、番台から振り返って夏の空に聞いた。蝉は少しも休まず、太陽は少しも勢いを緩めず、ただずっとそこに存在しているだけだった。健雄は静かに蝉の声に耳を澄ました。啓子と一緒に飛び立つまで見送った蝉が鳴いていないか、その蝉の声が聞こえてはこないか、無心で聞き入った。

汗を滴らせ、蟬の声に静かに耳を向けながら健雄は、昨日、銭湯を開く少し前に見た光景を思い出していた。祖父母の部屋で、祖父が背中を丸めて座っていたのだ。その時間は部屋に日が差さないの
で暗く、風も止んでいてむせるほどの暑さが部屋の形にこもっていた。健雄は物音を立てないように、祖父の背中を見た。祖父は小さい仏壇に飾られている、長男、健雄にとって父である人物の遺影に目を止めていた。祖父は無言だった。室内の温度が余計に上がったように感じられ、健雄は次から次に汗を垂れ流した。

昨日と同じだった。ただ何も言わずに座っているだけで汗が流れ続けて止まらなかった。

豆腐屋が吹く真鍮製のラッパが長く響いた。良く震える風鈴に似た声でヒグラシが鳴いた。夏至の頃に比べれば日が短くなった夕空に、薄い満月が控えめに昇った頃だった。番台に座る健雄の前に、啓子が一人分の入浴代を支払って通ったのだ。健雄は番台に座りながらぼおっと、啓子のことばかり考えていた。縛っていない直毛と空色のワンピースから伸びる細い手足を、視点の定まらない中空に眺めていた。だから実際目の前に啓子その人が現れても、最初想像の中の啓子としか思えず、傍観するように硬貨が置かれるのを見送ったが、それが現実と分かってから、ひどく狼狽した。啓子の自宅には風呂があったので、今まで銭湯で彼女を見たことはなかった。

啓子は下を向いて番台を通り過ぎ、女湯に向かい、おもむろに服を脱ぎ出した。時折番台の健雄の方を気にする素振りを見せながら、もったいないとでも言いたげに、一枚一枚丁寧に服を脱いでいった。純白の、おそらくお揃いである上下の下着だけになった啓子は、まともに触れてしまっただけは壊れてしまいうので、そこに視点を固定することはとてもできなかった。目の隅に彼女の姿をやっと入れていると、白い下着は薄くぼやけ、何も身にまとっていないように見え、健雄は目を固くつぶった。しかしまぶたの裏にも啓子の、凹凸の余りない腕、膨らみかけの乳房、締まった腰、やや張りを認める尻、

筋肉も贅肉も余り感じない足、そういった身体の部分部分が浮かび上がってきては、彼の脳味噌を突つき、辺り構わず刺激した。その幻影から逃れようとすると今度は、彼女の白い身体が、幼虫の殻から脱する、真白の蟬の成虫に思えてくる。蟬は身体を揺すりながら殻を抜け、突き出すように、生まれたばかりの色のついていない肌を強調する。彼女の肉体を想像しながら欲望を吐き出していた自分を、健雄は恥じた。啓子は自慰の低俗な対象になど相応しいわけはなく、健雄の眼前に堂々と立ちはだかっていた。その大きな啓子の存在を、今の健雄はただ見上げることしかできなかった。見上げて、自然に開いてしまった口を馬鹿のように開け、健雄は何もできずに小さく佇んでいた。

階段を上がり、健雄は二階の自分の部屋に入った。壁にかけてあるスミナガシの標本を取り、番台に戻った。スミナガシはお気に入りの一匹だったから、手作りの標本箱に一匹だけ入れて飾っていた。新たに入りに来る客をさばきながら、啓子が再び自分の前を通るのを、ひたすら待った。脱衣所には目を向けられなかった。啓子の乳房や尻を見て、桃女のそれらと無意識に重ねてしまうのが、耐えられなかった。健雄は視線を番台に落とし、時間の過ぎるのを待った。

「たっちゃん」

啓子の声にやっと顔を上げたが、目を合わせることはできなかった。彼女は頬の肌色を心もち濃くし、濡れて重たい洗い髪で、浴衣姿だった。浴衣の白に咲く大きな菊の花が、際立っていた。啓子の唇は潤っていた。言葉を滑らかに出すために、水分をためて光っているように思えた。健雄の名前を呼びはしたが、しかし啓子はそれに続く言葉を口にしなかった。二人は番台の前でうつむきがちに向かい合っていた。健雄は喉が苦しくなっていた。

「啓子、これ」

健雄は彼女の前に、番台の高い位置から標本箱を差し出した。スミナガシの暗い青い翅が、電球の光を吸って輝いていた。

「きれい……」

啓子はそれだけ言った。標本箱を手にとると、燐粉の一つ一つを数えるように静かに見つめた。蝶は見られていることが恥ずかしいのか、啓子の手の中でまた一際まぶしく光った。

「それ、やるよ」

「うん。ありがと」

啓子のお礼の言葉を聞き、少しは喉の奥が楽になった。健雄はやつと啓子の目を見、ちょうど自分の瞳を捕えるように見返した啓子と目が合った。二人は見つめ合って、それは随分長い時間に感じたが、銭湯に新たなお客が数人の塊で押し寄せて、番台の前が急に騒々しくなると、その時間はほんの短い一瞬に過ぎなかったように思えた。啓子はしばらく、何人かのお客が入浴代を支払うのを遠巻きに見ていたが、それが時間のかかることを察したのか外に出て、暗くなるのが早くなった町の流れに消えていった。お客の相手が終わった健雄が番台を飛び出して外の通りを見回しても、啓子の姿はもうどこにもなかった。

いがらっぽい喉を鳴らして唸るような音を立てて、下部が黒い不気味な雲が低く空を埋め始めた。「番台に戻れ」祖母が怒鳴るのとはほぼ同時に、雨が、大きな粒となって落下した。道に降り注ぐとそこだけが黒く染み、やがて道は濃い染みばかりになり、表面を水が流れるまでになった。素足と下駄の間に雨水が入りこみ、汗どころか体温まで一気に冷やされていくように感じた。

「おい、堀に浮いているって本当け？」

「ヤクザもんらしいべ。立派な彫り物があるって」

道を歩く大人がそう話しているのを聞き、健雄は走りだした。後ろで祖母が何かを叫んでいたが、その声は雨水に溶けていくようにかき消されていった。大股な駆け足で下駄の歯が地面に食い込み、泥水をはねる音だけを、健雄は一心に聞いていた。下駄がやや大きいと思い走りながら足元を見て、父が使っていた下駄を間違っていたてきてしまったと気付いたが、そんなことを気にしている暇はなかった。親指と人差し指の間が鼻緒に食い込み、皮が擦り切れる痛

みを感じた。しかし健雄は走った。膝の辺りまで泥水で汚して走り続けた。

やっと堀に着くと、大人たちが見物人の厚い壁を作っていた。立ったまま割って入ろうとしても大人の太く固い身体の中にはうまく入りこめず、健雄は掌と膝をつき、四つん這いで泥にまみれながら、大人の足元を縫って前へ出た。たまに指を踏まれ、引きちぎれるように鈍い痛みで叫びそうになったが、必死に耐えながら這いずることを止めなかった。

ほとんど全身泥の色に塗られ人垣の先頭まで来ると、雨で増水し、濁った堀の流れが目に入った。堀の少し張り出した石に引っ掛かり、男がうつ伏せに手足を力なく浮かばせ、はだけた浴衣が足元に広がっていた。男の周りは血で赤黒く水面が染められ、しかし雨水に洗われるので血液はすぐに泥色に混ざって目立たなくなった。男の、禪一つになった裸の背中には、牡丹と桜と一際大きな鯉があった。茶色の水も灰色の空も、何も言わずに佇んでいたが、際立った赤色や桃色が、違う世界から飛び込んできたように、灰と茶しかない世界のそこだけを気味悪く塗っていた。

ツクツクボウシとアブラゼミがほとんど同じくらいの数になった。たまに、どこから迷い込んできたのかミンミンゼミが一匹だけ鳴いていると、その声だけを聴こうと意識を集中してしまう。しばらく雨の降っていない地面は陽に焼かれて表面が粉っぽくなっていた。打ち水に涼しさを求めるように低空を飛ぶシオカラトンボの腹は、灰皿に落とす前の煙草の灰に似ていた。

「なあ、おめ、臭えんじゃねえけ？」

「え？」

「銭湯のせがれが、風呂も入ってねえのかよ？」

「……」

市の中心部に流れるやや大きな川で朝から釣りをしていた健雄は、隣で竿を握る信一にからかわれて黙った。垢と土で汚れたランニン

グを匂ってみると、ザリガニが棲む水の匂いと大して変わらないように思えた。

健雄は頭から、川の一番深い辺りに飛び込んだ。水が聞き分けのない暴れ方をして、信一は「おめ、いきなり何すんだ」と腕で顔を覆いながら叫んだ。健雄は胸の深さくらいの流れの中で身体をこすり、少しでも匂いをとろうと躍起だった。突然の侵入者に驚いた魚や昆虫や多くの生き物たちが、健雄の身体の周りを逃げながら泳ぎ、這い、飛んだ。

「そんなに、気にすんなよ。そこまで臭くねえよ」

弁解する信一を川の中から睨むと、彼は竿をかついで立ち上がり、帰る素振りを見せていた。まだ十一時過ぎなのにどこ行くんだと問うと、信一は「遊び、行くん」と答えた。信一は少し考えているのか間を置いて、欠けた前歯を目立たせながら、

「恵美子も、いんだ」

と前歯の暗闇を気持ち悪いほどに目立たせた。健雄は川から上がり、ランニングと短パンの水を絞った。

「釣果は、やっぱり」

手を振って大股に土手を上がって行く信一の、背中とは自分と同じくらい薄汚れていた。「恵美子は……」それ以上健雄の口からは言葉が出てこなかった。ただ彼の背中を見つめて、健雄は土手の下に突っ立ち、照りつける夏の日差しで全身をやたら短時間で乾燥させていた。

バケツに釣ったザリガニを三匹入れ、すっかり足に馴染んできた父の下駄を履き、健雄は桃女のアパートの戸を叩いた。畳を踏みしめる音がし、玄関が開くまでの間、鼓動を打つのが速まるのをごまかすように、健雄は啓子のハンカチを思い浮かべていた。祖母に洗濯はしてもらったが結局返すことができずに啓子は引越してしまった。健雄は時々ハンカチに鼻を押し付け、少しだけ感じる事ができる啓子の匂いを嗅いだ。そうすると決まって陰茎が硬くなつて

きて、必死に我慢をするが、最後は堪え切れずに自慰をしてしまった。終わった後の虚しさと、啓子に対しすまない気持ち押し寄せてきて、健雄は涙を流すことさえあった。しかしそれでも啓子は自慰をやめさせてくれなかった。

玄関の戸が開いた。桃女は最初に見かけた時と同じ、白地に紺の朝顔が染め抜かれた浴衣を着ていた。彼女は健雄の姿を見てちよつとだけ唇を開け、何かを言いかけたように見えたが、言葉は発しなかった。家にいたからだろう、浴衣の裾がややだけ、太ももがちらつと覗いた。うっすらと匂ってくる香りは、何度も嗅いだ桃女の体臭に違いなかったが、今日は風がなく汗を多めにかいているのか、それまでよりも強く匂いが感じられた。

「スパゲティ、作ってくれ」

健雄はバケツに入ったザリガニを差し出した。バケツの中で水が波打ち、驚いたザリガニがはさみを振りあげて暴れ、アルミが軽い音を立てた。桃女はバケツを受けとり、健雄を部屋に招き入れた。ちやぶ台に置かれた灰皿に吸殻が数本あったが、フィルターに桜が描かれてはおらず、チェリーではないことが健雄にも分かった。桃女が煙草を吸うのを見たことはなかったし、彼女の厚い唇からは煙草の匂いはしてこなかった。健雄はガラスの灰皿を汚す数本の吸殻を見つめ、眉間に嫌な皺が寄るのを感じた。吸殻は荒々しくもみ消されており、その消され方は桃女の細過ぎる指とは似ても似つかわなかった。

灰皿の横には桃が一個、食べ頃に白い皮を、ぼんやりと輝かせていた。匂いは意外に強烈で、部屋中が一個の桃に埋め尽くされているように思えた。灰皿と桃が並んで置かれているのは違和感があった。鼻の穴にこびりつくタール臭さは、風呂上がりの女の肌に似た桃の、横に置かれるべきではないと健雄には思えた。

健雄に背中を向けて台所に立ち、桃女は湯を沸かしていた。浴衣だけをまとった彼女の尻は、くつきりと輪郭を、桃の形に映し出していた。言葉を発することもできずに眺めていると、それがどんどん

ん健雄の方に迫ってきて、口から身体の中に入りこんできた。桃はまるで魚釣りの浮きであるのか喉の奥の方に浮かび、氣道が圧迫されて呼吸が苦しかった。痰を吐き出すように咳き込んでも、桃はつかかったままで、一向に取れなかった。

「坊ちゃん。手伝っておくれ」

桃女に声をかけられても、健雄はザリガニをさばくのを手伝おうとはしなかった。いつまで経っても来ようとしないう健雄を桃女が振り向いた時、健雄は彼女の眼前に、ズボンと下着を足首までずり下げて立っていた。

「俺、子どもじゃ、ねえぞ」

陰茎の皮をむき、鮮やか過ぎる先の部分を全部晒した。それをはつきりと見せつけるように、陰茎の根元を親指と人差し指でつまみ、先を桃女の方に向けて持ち上げた。桃女は健雄の下半身に目を向け、そして彼の顔を見た。彼女の瞳は、黒目が濡れたように光っていた。

（あいたたブンブン あいたたブンブン）

幼い頃聞いた子守唄の一節が、後頭部から脳味噌の後ろ側にかけて、にじむように聞こえてきた。

（あいたたブンブン あいたたブンブン）

喉につっかかった桃が、子守唄の声に合わせて揺れた。揺れる度に皮膚の内側にこすれ、きしむ響きが頭蓋骨に共鳴した。

桃女の黒目はずっと光っていた。日があまり入らず暗いはずの部屋が、急に明るくなった気がした。その光を、とても見つめていられなかった。

ズボンと下着を一気にずり上げ、ちゃぶ台に置かれた桃をつかみ、健雄はアパートを飛び出た。階段を一段飛ばしで下り、路地に飛び出るとちょうど通りかかったオートバイの運転手に「気をつけろ！」と怒鳴られた。健雄は背中から固い土に倒れ込んだが、桃は離さなかった。堀までの道を力の限り走り、焼けた地面から伝わってくる熱で下駄を忘れてきたことに気付き、しかし構わずに裸足のままで走った。桃を強く握りすぎて、熟れ始めの柔らかい果実に指が食い

込み、汁が漏れ指を濡らし、甘い果物の香りが鼻を刺激した。

堀に着くと、健雄は息も落ち着かせず、右手に握ったままの桃を、堀の水に思いつきり投げ込んだ。しぶきを上げ叩きつけられた桃は、浮き上がるとゆっくり流れ出した。さっき喉の奥に詰まったように、気持ちが悪かった桃は、全くそのままの状態でとどまっていた。音を出して何度も痰を吐いたが、取れなかった。

桃をまるで追っているかのように、十数匹の鯉が水中に黒く映った。その中に、鮮やかな橙色の一匹が混ざっており、それは桃の色に似ているようにも映った。健雄は汗を流れるままにして、未だ息も鎮まらずに、陽光を受けてまぶしい水面の照かりの向こうに、遠ざかる桃と鯉を見つめていた。桃と鯉は薄い橙を水にきらめかせて、健雄の視界の中で少しずつ小さくなっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5987z/>

桃と鯉

2011年12月19日23時55分発行